

## ■特集：公開シンポジウム ー新しい奄美世界の創出(2)ー

### 「奄美」からの出郷民たち

本山 謙二（日本学術振興会特別研究員）

#### 0. はじめに

今回「沖永良部2世」であり、1992年に49歳の若さで亡くなった作家・干刈あがたの作家活動から見てくることを中心とし、「奄美2世」に関する報告を彼女の両親の出身地である和泊町で行った。私自身「与論2世」として干刈の作品や言説に強い影響を受けてきたので彼女について話すこと、さらに両親の故郷の隣島である沖永良部で話すということは、それだけで刺激的な経験となった。また2次会も含め干刈の親類の方々も参加して頂き、そこで様々な話を伺えたことも貴重な経験となった。

#### 1. 「奄美」からの出郷民たち

東京都、神奈川県、大阪市、兵庫県の尼崎市、鹿児島市、福岡県の大牟田市という都市などは、奄美や沖縄から「本土」への人々の移動の歴史と密接に結びついた場所である。こうした場所の多くは、日本の産業化に必要とされる社会的な資本が集中し、よって過去から現在に至るまで多数の奄美や沖縄出身者が労働者として集められてきた都市である。奄美や沖縄からの人の移動の歴史を参照すると、その移住は日本が帝国化していった1920年代から加速された。そして現在は、そうした移住者たちも「2世」、「3世」などと呼ばれる次の世代の時代を迎えている。では、そもそもの意味で「2世」とは何なのか。まず「2世」の存在は、プロのサッカー選手や野球選手、芸能人などを通じて知られているだろう。そこには、親が奄美出身であると

いう血統主義に基づく観念が、「2世」へのまなざしの前提となっている。しかし、複雑化する「2世」をそうした血統主義を前提とした考え方だけでとらえると、その現実は見えてこない。単純な意味で両方の親が奄美出身という人だけではないからだ。また「2世」は、親が移動した様々な場所で生まれ育つなどの多様性を持つために、一概に「2世とは何か」という問いに対し簡潔に答えることは非常に困難となる。それは「2世」自身による言説が非常に少ないという現実が物語っている。そこで数少ない言説の中から、いくつかの言説を参照し、「2世」という存在のひとつの側面を見ていきたい。そこでまず参照とするのは、三池炭坑に移動した与論出身の両親を持ち、大牟田市の新港町（与論の人たちのための社宅のあった場所）で生まれ育った「与論2世」であり、イラストレーターとして有名な本くに子による原風景の記述を参考にしたい。

ケンカの絶えない二人なのに、夜になると父は三味線を弾き、それにあわせて母は唄い踊る。沖縄地方に伝わる島唄。せつなく悲しい節。ぱっと陽気な節。日々のうさやつらさを忘れるよう、それはずっと続いていた。(注1)

ここで本は、両親が社宅で島唄を唄う姿を記述している。続けて東京の青梅市で生まれ育った「沖永良部2世」の干刈あがたの原風景は、

声を言葉として聞くようになってから、その響きがユリに投げかける暗さは、意味が違っ

てきていた。それは、直接的な家の暗さになっていた。父母の間で方言で交わされる言葉は、いつも諍いの言葉だった。(注2)

このように本と干刈がともに描いているのは、諍いの風景である。特に干刈が詳細に書いているのは、父が母を罵り、母がそれに応答する諍いの声が、島の言葉であるという風景である。もちろん前提としては、「本土」における奄美や沖縄の人に対する差別や現地の人に従事しない仕事に就かされる理不尽で過酷な労働、そして「本土」での慣れない暮らしなどが、諍いが起こる背景の要因のひとつとしてあるだろうが、子供にとっては、その諍いの場は辛い原体験となる。これは、「在日朝鮮人2世」の作家によっても繰り返し論じられてきた風景である。さらにヨーロッパ諸国やアメリカなどの移民国家で、移民自身や移民先で生まれ育った世代による表現活動にもよく題材として選ばれているテーマである。「奄美2世」に話を戻せば、「加計呂麻2世」であり、音楽シーンのなかでは、主にクラブカルチャーの文脈で活躍しているUAという女性歌手も加計呂麻島との関係を語るなかで自分の家庭について、「親戚とか家族とかってしっかりしている家じゃないから・・・」と述べている。このように「2世」にとって島との最初のつながりは、まず家族問題と密接な関係をもつ。干刈が描いた原体験をもとにその家族の中を考察してみると、通常は日本語で交わされていた家族との会話が、諍いの時、それは往々にして母を罵る父の権力的な姿と重なり合いながら出現してくる島口を通じた島とのつながりである。つまり島口などの奄美や沖縄の文化は、家の暗さとして、それは前の世代のように直接的な差別を受けなくとも否定的に継承されるのである。これは移住先で育った世代にしてみれば、まさに父を通じて、それは往々にして母を罵る父の姿と重なり合いながらの「奄美

でしかない。だから本人にとっては、父を通じた否定的な「奄美」からの解放であっても、移住先で育った子供が「奄美」に否定的になれば、父からすれば今住む場所に「同化」していると写り、親子の間で断絶が起きることになる。

しかし「2世」が、そうした家族問題などと重なり合うアイデンティティの困難さを引き受けたときに、そこには新たな存在としての可能性が見えてくる。「在日朝鮮人2世」の作家・金鶴泳は、社会的な場面での差別ばかりではなく、父を通じた差別によって歪められた家の問題を鋭く描いた『錯迷』のなかで、すでに老いらくの漂いはじめている父の肉体と父親が泣く行動から、父のなかに「歴史」を発見する契機を描いている。

むしろこの父もまた、醜怪な魔物に操られている、被害者ではないのか……。そう気づいた途端、私は不意に正気に返ったようであった。(注3)

これは父が年をとり、暴君を降りることで、「私は不意に正気に返ったようであった」とあくまでも、〈よう〉であったと表現するように、父を肯定するのではなく、父も被害者ではないのかと理解する方向性をもつ営みから、歴史的存在としての自己を発見する契機となっていることを示している。干刈の場合は、沖永良部での以下の経験が、大きく自己を変革させる契機になる。

どうやらタビというのは、単なる船旅とか旅立ちの旅ではなく、島に対して本土、本土での暮らし全体をも指しているらしい。本土で二十数年暮らしてもそれは旅、そこで子供を産んでもそれは旅の子、帰るべき地は島である、タビはそういう意味であるらしいことがわかった時、私の中で何か揺れた。やがて、人々の間に黒糖焼酎がまわると、一人が立ち

上がって踊り、他の人々は、声を合わせてうたいはじめた。なんという唄なのか、どういう意味なのかはわからないが、それは、幼児の闇の中で聞き慣れたあの旋律だった。さっきから揺れはじめていたものが、急にどっと崩れた。手足がふるえて、あとからあとからこみあげてくるものを押えることができない。私は、片手で眼を覆ってうつむくと、すすり泣きはじめた。自分でもその反応におどろきながら、泣きやむことができない。けれど意識は、どこか醒めていて、私が泣いているのではなく私の血が泣いているのだ、という気がしていた。(注4)

干刈も若い頃に両親などが唄っていた島唄を聴いた経験やタビという言葉を知る経緯の中で、自分の中にある過去との連続性を干刈は、「私が泣いているのではなく私の血が泣いているのだ」と表現し、その自分のなかにある過去とつながる「歴史」の発見を鮮やかに述べている。そして、こうした経験のなかで注目すべきは、干刈の「けれど意識は、どこか醒めていて」という表現である。あくまで「タビ」する存在としての自己認識である。そして干刈は、以下のような自己認識を新たな可能性として提示した。

私の両親は奄美出身者だが私自身は東京で生まれ育ち、小説も東京の人間関係を書くことが多い。そんな私は時に、奄美・沖縄と血がつながっているのになぜ沖縄を書かないのか、沖縄共同体の一員としての意識が薄いのではないか、と言われることがある。でも私はこう考える。私は故郷を離れざるを得なかった者の子として、本土に生まれ暮らしている。そして私の周囲は、農業を離れた者の2代目や、元武士のX代目や、故国から日本に連行された者の子孫や、そうした者の集合なのだ。それなら互いに歴史を負ったそれぞれがいま、隣人としてここに暮らしていることを大切に

し、理解し合いつなぎ合い、互いがよりよく生きられる場所をつくっていくことも、自分の歴史や血を愛するという事ではないかと。(注5)

ちなみにこの文章は「在日朝鮮人2世」によるエッセイの書評である。さらに前述した本くに子も、三池炭坑のある大牟田市で与論出身の両親のもとで育った経験から、

今思えば、あの町で育ったからこそ、本当のことを知りたくて東京に出てきたんだと思う。働いても楽にならない理不尽さ。人間の命の尊さをことごとく切り捨てていく日本社会のおろかしさ。何が原因なのか、この目で確かめたかったし、その気持ちは今も変わりが無い。(注6)

本も自分の中にある過去との連続性から導かれた思想を述べている。UAも同じ加計呂麻島出身の唄者・朝崎郁恵のアルバムに囃子として参加したり、島への思いを歌ったりしている。これはミュージシャンであるUAにとって島唄を習い、唄い始めるという行為は、自己の「歴史」を発見する実践といえるだろう。こうした様々な「2世」の活動実践や言説は、単純な血統主義や人種主義に基づいたアイデンティティという概念自体の変更をも促すことになる。ジャマイカからの移民であり、イギリスに暮らす文化研究者スチュワート・ホールは、優れたアイデンティティ論のなかで以下のように述べている。

アイデンティティを、すでに達成され、さらに新たな文化的実践が表象する事実として考えるのではなく、そのかわり、決して完成されたものではなく、常に過程にあり、表象の外部ではなく内部で構築される「生産物」として考えねばならないだろう。(注7)

ホールによるこの表現を簡単に解説すれば、アイデンティティは、血統主義や人種主義に代表されるような「あるもの」という概念だけではなく、決して完成されることない新たな存在に「なるもの」であるという認識である。これは、干刈の作家活動のテーマが「沖永良部2世」から始まり、「おんな・こども」、「流れ者」、離婚した女性の生活、「不登校」をめぐるテーマなどを描いたような干刈の感受までも広い意味でアイデンティティと考える可能性を示している。干刈は、そうしたテーマに通底する感受を「周辺」への共感だと言う。このように「2世」とは、多数の人々に無意識的に組み込まれている国家や人種や民族という概念や、またそれぞれの生まれた場所や家庭環境などの多様性を持つがゆえに、語ることが困難な状況が存在するが、干刈などが示した幅広い適応力を持つ「周辺」という感受は、「2世」の自己認識を考えるうえで、大きな可能性をもつ貴重な指標となっていくだろう。本稿で、こうした自己に、そして過去とのつながりの意識、またそれぞれの多様性のなかで自己に向き合うことの困難さと、その重要性を詳細に論じてきたのには、NHKの連続ドラマ『ちゅらさん』をめぐることがある。『ちゅらさん』は、祖父母が沖縄人であり、東京出身の父親をもつ、さまざまな交差するアイデンティティをもった東京に生まれ育った脚本家・岡田恵和により書かれたドラマである。彼はその制作の動機に関し、

確かに沖縄には問題が山積です。でも、そこで暮らしてる人は、毎日、そのことでイジイジしているわけじゃない。祖父母だって、複雑な思いを抱えていたにしろ、それだけで生きていたわけではない。なのにドラマになると、毎晩みんなで基地の話をしているか、さもなければただのリゾート地か、そのどっちかの沖縄しか描かれていなくて。その真ん中にある本当の人間像みたいなものを、僕は描

きたいのですね。(注8)

と述べている。確かにドラマは、舞台を小浜島という「離島」、さらには那覇市、東京という直接的には基地とは無縁の場所を舞台設定したということもあろうが、そこには基地の話や沖縄に存在する歴史的な問題はでてこない。むしろ巧妙に避けたといえるだろう。と同時に、脚本家のアイデンティティでもある、「本土」で生まれ育った次の世代としての「葛藤」や「矛盾」も語られることはなかった。こうした作品は、少なくとも「2世」にとっては、新たな可能性の提示というものはない。こうした言説に触れるとき、ますます「2世」にとって、干刈らの先人が示したように多様であり、困難なことではあるが自己に向き合い、それぞれの過去とつながる「歴史」の重要性を感じずにはいられない。

最後に今回沖永良部で報告するにあたり、今後沖永良部で干刈の言説を通じ、「2世」のことはもとより、特に女性やこどもの視点から、様々な島の「問題」を読み返すなどの作業が活発になればと切に思う次第であった。

#### (注釈)

(注1) 本くに子「パステル-私の肌合い」講談社、1988年、12頁。

(注2) 干刈あがた「入江の宴」『ホーム・パーティ』新潮文庫、1990年、50頁。

(注3) 金鶴泳「錯迷」『金鶴泳集』河出書房新社、1972年、184頁。

(注4) 干刈あがた「島唄」『樹下の家族島唄』福武文庫、1986年、168頁。

(注5) 干刈あがた『40代はややこ思惟がいそが<sup>しい</sup>恋意』批評社、1998年、219-20頁。

(注6) 本くに子「パステル-私の肌合い」講談社、1988年、12頁。

(注7) Hall, Stuart, "Cultural Identity and Diaspora" Identity,

Community, Culture, Difference, Jonathan Rutherford(ed.) Lawrence & Wishart, London, 1990. を参照した。日本語訳については、スチュアート・ホール「文化的アイデンティティとディアスポラ」『現代思想・総特集スチュアート・ホール』青土社、1998年3月臨時増刊を参考にした。

(注8) 『NHKドラマ・ガイド連続テレビ小説ちゅらさん』NHK出版、2001年。

(付記) 本稿は、シンポジウムの記録と言うことで、これまで干刈あがたについて筆者が執筆したものと重複が多いということは断っておきたい。よってこれまで干刈あがたを論じたものをあげておきたい。『『沖縄』からはじまるタビ—干刈あがたの世界から』『ユリイカ』青土社、8月号、2001年。これを理論的に書いた学術論文として「漂泊することの肯定に向けて—干刈あがたの言説から」『解放社会学研究』16、日本解放社会学学会、2002年。また干刈の小説群をアメリカのラティーノ文学との比較の中で論じた「『諍いの風景』インナーシティで生まれた文学群から」杉浦勉・鈴木慎一郎・東琢磨編『シンコペーションラティーノ／カリビアン文化実践』新宿書房、2003年。

「加計呂麻2世」のUAについては、「呼吸するために「そろそろ」はじめること—移民、コミュニティの音楽文化」『音のカストリートをとりにどせ』インパクト出版会、2002年。

#### (干刈あがたに関する資料)

資料として干刈が島への想いを言及した文献を記しておく。まず全集は、『干刈あがたの世界1—6』河出書房新社、1998—99年。

「在日朝鮮人3世」への共感から自らの立

場を語ったものとして、姜信子の『ごく普通の在日韓国人』朝日文庫、1990年、の書評があり、それは『40代はややこ思惟がいそが恣意』批評社、1998年、に掲載されている。

ペンネームの由来については、対談「同世代の共感・60年代青春からの出発」『早稲田文学』12月号、1993年、と「行商人のように」『波』11月号、1989年、に詳しい。「行商人のように」のなかでペンネームについて以下のように書いている。さらにここには、本稿で「周辺」としての意識について述べたが、そのことも書いているので全文を引用しておきたい。

「あがた」というのは漢字をあてると「県」で、中心ではなく周辺と言う意味があります。沖縄や奄美の方言では、「ここ」に対する「かなた」「あっち」、島から見た水平線の彼方「ニライカナイ」という意味もあるんですけど、とりえず中心に対する周辺を意識しました。女子供というのもある意味では、周辺だし、例えば東京でも、小さな町に住んでいる人の日常も周辺とってよいでしょう。そういう人々の考えや感じ方を書いていきたい、伝え合っていきたい、という気持ちがあって書き始めたのね。私はどうも、自分が小説を書くことを、芸術活動とか創作活動とかはとても言いにくい。もう少し生活に近いところで、自分なりに声を出していくというようなことを考えている。

沖永良部出身の両親との東京での生活、また島への帰郷時の心境や島へのこだわりなどは、『島唄樹下の家族』(福武文庫、1986年)、「入江の宴」『ホーム・パーティ』(新潮文庫、1990年)の小説に詳しい。

#### (シンポジウムでの質問に関しての補足)

補足として、シンポジウムで私の報告に対する質問があったが、当日上手く答えた自信がないので、ここに記しておきたい。質問は、

沖永良部郷土研究会の先田光演氏からの質問であった。その内容は、明治後期に当初は石炭の外積み作業員として長崎県の口之津へ移住し、後に大牟田市（福岡県）や隣接する荒尾市（熊本県）の三池炭坑へ再移住した歴史に関しての質問であった。この移住史は、三池争議に関与する中で、そこで暮らす与論人に出会った経験をもとに、その歴史を知り、また本人自身が植民地朝鮮からの「引き揚げ」の経験をもつ森崎和江らによって記された『与論島を出た民の歴史』葦書房、1996年、に詳しいように、主に与論人の移動の歴史として語られてきた。なお当事者が書いたものは、若松沢清（編集責任）『三池移住・五十年の歩み』、与論奥都城会、1966年、また移住100年を記念して制作された『与論島から口之津へそして三池へ』大牟田・荒尾地区与論会、2001年、がある。しかしこの移住は、当初沖永良部からも移住は行われており、今回の質問は、そうした歴史をふまえた上で、与論とは違い定住しなかった沖永良部からの移住者について、その定住しなかった理由についての鋭い質問であった。

この移住については、『和泊町誌』にもその移住史は記されているが、与論からだけでなく、沖永良部、さらには徳之島からも口之津へ移住している。与論だけが定住したことは、戸長（現在でいうところの町長）などの指導者が、明治への移行にともなう社会経済システムの変化と明治後期の甚大な台風被害による島の疲弊を背景にした「第二の故郷」建設として、自らが移住したことが原因と考えてよいが、大牟田市の歴史に詳しい新藤東洋男の『三池鉱山と与論島』人権・民族研究会、1965年、という文献に記されている沖永良部調査を参考にすれば、移住地である口之津で「与論人との対立もかもされていたのである。」と記されているのは一つの参考となるだろう。根底には、石炭の船積荷役という過酷な労働が他の場所への移住を促進させた主な

原因であろうが、新藤が取材で明らかにしたような移住者同士の対立があったということも、沖永良部からこの移住史を考察するときには特に重要な視点であろう。ちなみに口之津や三池から離職した人々や与論以外の島民は、その後は、佐賀の杵島炭坑、えびの市の矢岳トンネル工事、神戸などへ分散したようである。以上が当日上手く答えられなかった部分であり、今後、対立の原因などについても私自身さらなる調査をしたいと思っている。

最後に、今回のシンポにあたりご尽力された鹿児島大学関係者、和泊町教育委員会、沖永良部郷土研究会に感謝しています。そのなかでも特に川上忠志、前利潔、両氏には、お世話になりました。記して感謝します。（おわり）

<英語表記> 「奄美」からの出郷民たち  
シンポでのタイトルは、「在日『奄美』2世について」であったが本稿では、英語表記の問題から以下に改めた。

The Diasporas in Japan : Immigrants from the People's "Amami" Islands